

# 漂着ゴミから地球環境を考える

～ 島ゴミサミット・つしま会議を開催～

日韓両国から  
150人が参加

漂着ゴミは、対馬をはじめ日本海沿岸の島や海岸に流れ着き、その処理費用が自治体にとって新たな負担になっています。漂着ゴミはその多くがプラスチック製品であるため、海岸線の景観を損なうだけでなく、漁業資源、自然環境に与える悪影響が心配されています。また、離島では、処理施設が無く本土への運搬費用が必要のため、厳しい財政事情の中、収集しても処理できないなど特有の問題も発生しています。

この漂着ゴミ問題に対し、具体的な対応策を探ろうと10月9日、10日の両日、JEAN/クリーンアップ全国事務局などNGO3団体の主催、対馬市の共催、環境省、国土交通省等の後援により、厳原町で「島ゴミサミット・つしま会議」が開催されました。

## 島ゴミサミットとは

漂着ゴミを国レベルで取りくむべき地球環境問題の一つとして、平成15年8月に山形県酒田市の離島「飛島」で「離島ゴミサミット・とびしま会議」を開催したのがはじまり。「つしま会議」は2回目で、来年度は島根県隠岐の島町で開催されます。



## 今回のつしま会議を主催した3団体

### JEAN/クリーンアップ全国事務局

(Japan Environmental Action Networkの略) 海のゴミ問題解決のため活動している非政府組織。  
今回の島ゴミサミット・つしま会議の主催者。

### 特定非営利活動法人 パートナシップオフィス

山形県酒田市のNPO法人。昨年のとびしま会議を主催し、今回のつしま会議においても、JEANとともに企画、準備段階からたずさわる。

### 日韓市民スクエア

今回のつしま会議では、釜山外国語大学を始め韓国側からも約20名が参加しました。韓国側との連絡調整、講演の通訳などを担当した市民団体。

9日の会議では、対馬市上県支所環境衛生班の平山哲正課長補佐が「対馬市における海岸ゴミへの対応」と題し、昨年から実施している日韓両国のボランティアによる海岸清掃について説明しました。上県支所では、今年5月29日から30日の両日清掃活動を行い、510㎡の漂着ゴミを回収し、約300万円の処理費用を負担しました。

北海道大学の小城春雄名誉教授による基調講演「プラスチック廃棄物による海洋汚染～離島から見える地球環境の未来～」では、今の私たちの生活に欠かせないプラスチック製品が、廃棄物となり膨大な量が適切に処理されることなく、世界中の海に蓄積されている現状説明やプラスチックの使用を必要最小限にするため「非使用」、「制限的使用」、「海洋汚染対策に適した行政システム及び研究システムの構築」などの10項目の提言がされました。

また、漂着ゴミの回収や調査研究に取り組んでいる日韓両国11の団体と個人が、それぞれの立場から現状説明と問題提起を行い、最後に国土交通省総合政策局技術調査官の中島威夫氏が『「美しい国づくり」に向けて』と題した講演で、昨年7月に公表された「美しい国づくり大綱」について説明して、この日の日程を終えました。



漂着ゴミの状況(上県町)

10日は、前日の講演や問題提起を通じて、国（省庁）、韓国、研究者、地域の4つの立場に分かれてのシンポジウムが行われ、漂着ゴミ問題の解決に向けた連携方策について話し合われ、地元漁業者の代表からは、「漂着ゴミは漁業者に重い負担になっている、一刻も早い解決策を」という要望が出されました。

最後に、対馬市から漂着ゴミ問題に対するメッセージが読み上げられ、シンポジウムを終了、午後からは豊玉町志多浦のミウ田浜へ移動し、地元住民40名ほどと一緒に、海岸に散乱する漁網やポリ容器、発泡スチロールなど2トントラック20台分を回収して、全日程を終えました。

ゴミ回収の状況



### 海洋ゴミはなぜ問題か

海のゴミはその所在により、大きく3つの種類に分類されます。一つは対馬の海岸線、特に西側では、見慣れた光景である海岸への漂着ゴミ。発泡スチロールやペットボトルなどは、海岸だけでなく、風で山腹にまで吹き上げられ、場所によっては1～2mほど堆積しているケースもあります。これらのゴミは対馬の貴重な観光資源である景観を台無しにするだけでなく、いくら収集しても次々にやってくるため、その処理に多額の税金が投入されています。

二つ目は、海を漂う漂流ゴミ。鳥がゴミの魚網にからまったり、海がめがビニール袋を誤飲するなど生態系や漁業資源への影響が深刻な問題となっています。

三つ目は、海底に堆積しているゴミ、特にプラスチック製品のかけらは分解されずに残り、回収することも困難です。また、最近になって、これらのプラスチックからは、環境ホルモンと呼ばれる化学物質が溶け出す可能性が指摘されています。

このように、いまや日本海全体が「巨大なゴミ箱」といっても過言ではないほど、ゴミであふれています。対馬の海岸に流れ着いたゴミは、全体のごく一部なのかもしれません。

### つしま会議を終え、対馬市に期待されること

島ゴミサミットは無事に終了し、出席された省庁関係者にも現状を見てもらうことで、十分な成果が上がったと思われます。

しかし、海洋ゴミが目に見える海岸から日の当たらない海底（極端な例ですが1991年、水深6000mの日本海溝でマネキンの頭部が発見され話題になりました）にまで及んでいるように、問題はますます深刻になり、自治体、住民にかかる負担が増大するのは明らかです。海洋ゴミの発生原因は複数の国にまたがり複雑に絡みあっており、これを解きほぐすことは容易ではありません。

このような現状に対し、自治体、NGO、漁業者など様々な団体が個別に取り組んでいますが、これをまとめて、多様な関係者の協議の場を設置し、より効果的な解決策を見出すことが求められています。対馬市は、韓国と海を隔てわずか50kmの距離にあり、市民間の交流も盛んに行われています。今後、漂着ゴミ問題に対する法整備を働きかけていく上で、対馬市は絶好の位置にいます。漂着ゴミにかかわる自治体、研究者、漁業者、NGOと連携し、リーダーシップをとることが求められています。